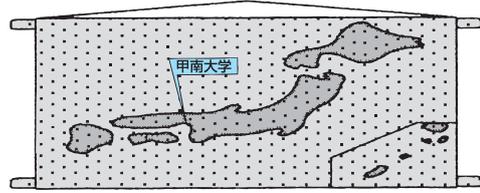


Zephyr

〈第81号〉

ゼフィール・にしかぜ



<https://www.konan-u.ac.jp/kilc>

《特集＊兼任研究員の研究紹介》

★所長からのメッセージ：国際言語文化センターの新生にあたって……………	佐藤 泰弘……………	2
〔ドイツ語〕 コミュニカティブな教科書でドイツ語を学ぶ学習者—学習観と動機づけ……	藤原三枝子……………	3
〔フランス語〕 フランス演劇、多文化共生、英語母語話者のフランス語学習法を研究中……	中村 典子……………	4
〔中国語〕 私の研究……………	胡 金定……………	5
〔韓国語〕 研究と問題関心の可視化……………	金 泰虎……………	6
〔日本語〕 これまでの日本語の研究から……………	谷守 正寛……………	7
国際言語文化センターからのご案内……………		8

甲南学園創設者

平生鈞三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」



「英語＋1（第2外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年3回刊行）

今後の『ゼフィール』について

『ゼフィール（Zephyr）・にしかぜ』は、1995年度から外国語及び異文化に関する教育を行う国際言語文化センターの機関誌として発行され、外国語・国際理解に関わる正課及び正課外の教育活動に関する情報の提供や発信を行う内容を中心に構成をしてきました。

しかし、2022年度から甲南大学の組織改編に伴い、国際言語文化センターは全学教育推進機構に属することになり、研究及び正課外教育を担う研究所として、その役割が変わりました。そこで、研究所の国際言語文化センターに所属する教員は、全学共通教育センターに属しつつ、研究所では兼任研究員として研究や正課外教育を行うこととなります。

このような変化の中、従来、国際言語文化センターが発行してきた『ゼフィール』は、研究所としての国際言語文化センターが受け継ぎ、研究所の研究や活動に関する情報を発信する機関誌としての役目を果たして参ります。今後も変わらず、年3回（4月・7月・12月）、研究所の果たす役割を中心に紙面を構成して発行します。

（金 泰虎）

国際言語文化センターの新生にあたって

全学教育推進機構長・国際言語文化センター所長 佐藤 泰弘

30年以上も昔のこと。冷戦の終結を迎えて米国の政治学者フランシス・フクヤマが「歴史の終わり」を論じました（著書の邦訳は『歴史の終わり』三笠書房、1992年）。これに対し、浅田彰はフクヤマとの対談において、歴史が動き出すことを論じ反論しました（『「歴史の終わり」を越えて』中央公論社、1990年）。「歴史の終わり」という論調には今では誰もが違和感を持つでしょうが、それは一時期の風潮の一面を反映していたと思います。

冷戦は世界に嵌められた籠（たが）であり、冷戦が終わることによって籠が外れ世界が大きく動き出すという予見は、冷戦終結にともなう祝祭感を相対化するとともに、やや不穏で不吉な印象を与えていました。そして冷戦後の世界においては、グローバル化による各国・各地域の相互依存が強まる一方、内戦や地域紛争をはじめ種々のレベルで対立・格差・分断が進みました。保育園の保護者会で一緒になった、ユーゴスラビア出身の研究者は、自分たちの祖国はユーゴであると淡々と語り、米国に仕事を求めました。

世界が大きく動き始めた時代、1994年に、国際言語文化センターが発足しました。平生夙三郎の掲げた「世界に通用する人物」を育成するためには、国際的なコミュニケーション能力の養成が欠かせません。同センターは外国語・国際言語文化に関する教育・研究を担当してきました。2022年4月、正課教育を全学共通教育センターに移管し、全学教育推進機構のもと外国語・国際言語文化に関する調査・研究および正課外の教育活動を担当するセンターとして兼任研究員を募り、国際言語文化センターは新しいスタートを切りました。

新しいセンターには、ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語、そして日本語教育の5名の先生方が兼任研究員として参画してくださいました。私は全学教育推進機構長としてセンター所長を担当しており外国語・国際言語文化については素人ですが、兼任研究員の先生方と協力し、センターの活動を一步一步進めたいと思います。

何か新しい取り組みが必要だろうかと思案していた時、偶然の巡り合わせで、講演会の企画を紹介いただきました。そこで国際言語文化センターの運営委員会で年1回の「文化を結ぶ講演会」を提案したところ、年2回の開催で多様なテーマを扱えるようにしようということで、シンプルに「国際言語文化センター講演会」の開催が決まりました。国際理解・言語文化の領域で活躍する方を講師に招き、学生および社会人を対象とした講演会です。

第1回の講演会は、パトリス・ボワトー氏を講師に迎え、「日本とヨーロッパの文化交流—光と影—」と題して、6月8日（水）の夕方に開催しました。ボワトー氏はフランス生まれで、写真家・映画監督等として広く活動し、大阪ヨーロッパ映画祭の実行委員長として文化交流に尽力されてきました。その功績により2021年にはルネサンス・フランセーズ（フランスの公益社団法人）から文化普及賞金賞を贈られています。それだけでなく同氏はフランス語の非常勤講師として長らく本学の教壇に立ち、甲南とも所縁の深い方です。

講演会では、ボワトー氏が自らの生い立ちを振り返りながら映画との関わりを紹介され、大阪ヨーロッパ映画祭がどのように誕生したのか、どのように工夫を凝らして運営してきたのか、さらに写真家としてのご自身の活動の様子をお話いただきました。熱のこもった講演は、約50名の聴衆を得て、盛況のうちに幕を閉じました。終了後も講師を囲んで談話が続けていたことが印象的でした。ボワトー氏が紹介された映画祭の写真に、保育園で一緒だった日仏会館の職員さんを見つけた時は驚きました。

さて本センターは従来の活動も継続していきます。本誌『ゼフィール』も、編集担当の金泰虎教授による巻頭言のように、研究成果を幅広い方々に伝える媒体として引き続き発行していきます。新生したセンターの展開にご期待ください。そして多くの方々に『ゼフィール』を手にとっていただけますことを、切にお願いいたします。

私の研究紹介：コミュニケーションな教科書でドイツ語を学ぶ学習者—学習観と動機づけ

国際言語文化センター兼任研究員 藤原 三枝子

日本の外国語（英語）教育の方針が「言語を用いて何ができるか」という行動中心（action oriented）に移行する中で、大抵の場合、大学で始めて出会うドイツ語を、コミュニケーションな教材で学ぶ大学生の学習観や動機づけを研究テーマとしています。質問紙を使った調査によって統計的に分析することを中心としていますが、聴き取り調査も並行して行うことにより、総合的な理解を目指しています。こうした実証研究をとおして、大学におけるドイツ語教育への提言を行うことができると考えています。

これまでの調査から、初修外国語としてドイツ語を学ぶ大学生の学習観、つまり「外国語（ドイツ語）の学習とはこういうものだ」というビリーフは、高校までの英語学習経験によって影響を受けていることが分かっています。英語教育は、約10年ごとに行われる学習指導要領の改訂によって、現在は、小・中・高等学校での学習の接続に留意し、4技能を総合的に育成する指導を充実させ、コミュニケーションを支えるものとして文法指導を言語活動と一体的に行うように改善すること、また、ヨーロッパ評議会が2001年の言語年に発表したCEFR（Common European Framework of Reference for Languages）におけるスピーキング能力のカテゴリーを参考として、「話すこと」を「やり取り」と「発表」に設定し4技能5領域とするなど、言語活動が一層重要視される傾向を示しています。こうした外国語教育の新しい方向性は、CEFRの世界的な広がりとともに、大学におけるドイツ語教育にも影響を与え、言語活動重視の教科書が日本でも出版されるようになりました。

筆者が2018年12月～2019年1月に実施した質問紙調査は、ドイツ語の運用能力養成を目的とするコミュニケーションな授業に参加する学習者を対象として（14大学986人の学習者が協力）、ドイツ語使用者としての自己概念について、Z. Dörnyei (2009) のL2 Motivational Self System（以下、L2MSS）を基に、5：そう思う～1：そう思わないの5件法で行いました。コミュニケーションな授業では、ドイツ語を使う自己を授業の中でどのように育成するかが重要となりますが、データ分析の結果、L2MSSの中心概念である「理想L2自己」（「ドイツ語が使えるようになって自分が想像できる」などドイツ語使用に関する理想的自己概念）の値は高くなく、道具的動機づけの中でも自己決定度の低い、成績や単位の取得を目的とする「道具的動機づけ（予防）」が高い値を示し、ドイツ語と将来の仕事との関連を内容とする「道具的動機づけ（促進）」は、中央値の3程度にとどまりました。外国語の能力は自分の将来にとって役立つと思っはいるが、ドイツ語については現実的なイメージに繋がっていないと思われます。その一方で、ドイツ語圏の文化への関心や社会への肯定的態度が見て取れますが、平均値が高くとも標準偏差が大きいことから見解に散らばりがあり、重回帰分析の結果、学習意欲には直接的な影響は見られませんでした。また、ドイツ語の授業体験（ドイツ語学習への態度）は肯定的ですが、同様に、標準偏差は小さくありません。ドイツ語学習への意欲は3を少し上回る程度でした。

L2 Motivational Self System の各カテゴリーと記述統計（平均値・標準偏差）

カテゴリー	M	SD	カテゴリー	M	SD
ドイツ語学習への意欲	3.124	.959	道具的動機づけ（予防）	4.015	.817
理想L2自己	2.392	.921	ドイツ語学習への態度	3.526	1.009
義務L2自己	2.060	.948	ドイツ社会への態度	3.803	.950
家族の影響	1.872	.971	ドイツ語圏の文化への関心	3.853	1.052
道具的動機づけ（促進）	2.984	1.028	統合的動機づけ	3.399	.833

ドイツ語を使う自分をイメージすることができなければ、運用能力の向上や学習の継続には繋がりにくいと考えています。「理想L2自己」の形成のためには、教室での勉強だけでなく教室外で目標言語圏の人々とICTをつうじてコミュニケーションする機会を提供するなど、「プロジェクト型授業」が有効な方法の一つであると考えています。

フランス演劇、多文化共生、 英語母語話者のフランス語学習法を研究中

国際言語文化センター兼任研究員 中村典子

学生時代にフランス演劇に魅了された私は、大学の語劇サークルに属し、フランス語劇で2回ほど舞台に立ちました。また、20歳のとき、某新聞社から奨学金をもらって1年間パリ第三大学の演劇科に留学し、フランス人学生たちと一緒に大学の授業を受けながら、2週間に1度はパリの劇場に通っていました。その後、大学院に進学し、20世紀のフランス演劇、とくにジャン・ジロドゥ Jean GIRAUDOUX (1982-1944) の戯曲について研究することにしました。ジロドゥを研究対象に選んだことがきっかけとなって、海外のジロドゥ学会に出かけるようになりました。というのも、当時、日本でジロドゥを研究していた人は、かなり年配の名誉教授しか見当たらなかったからです。ジロドゥの作品について語り合う仲間を求めて、ジャン・ジロドゥ友の会 (Les Amis de Jean Giraudoux) と国際ジロドゥ研究学会 (Société Internationale des Etudes Giralduciennes) に入会しました。フランスのパリ大学やクレルモン＝フェラン大学での学会開催には複数回参加し、カナダのモントリオール大学、ギリシャのテッサロニキ大学、トルコのアンカラ大学で開かれた学会では口頭発表を行いました。ジロドゥは外交官で、いろいろな国に派遣され、その合間に戯曲や小説を書いていました。そのためか、世界中に（イスラム教圏にもユダヤ教圏にも）研究者がいて、国籍の異なる人々、多文化の環境のなかで文学研究を続ける意義を深く理解できるようになりました。

甲南大学に着任してからは、「多文化共生」というテーマにより興味を抱くようになり、兵庫県が推進する HUMAP (Hyogo University Mobility in Asia and the Pacific : 兵庫・アジア太平洋大学間交流ネットワーク) というネットワークのひとつで、研究者間の共同研究を推進する「学術国際交流」の制度 HORN 事業を活用して、3人の著名な研究者をそれぞれ1か月間、本学に招聘することができました (2006年、2010年、2017年)。そして、その都度、学生・社会人の方々向けに「多文化共生」に関する国際シンポジウムを開催しました。

2019年からは、英語圏における外国語教育（特にフランス語教育）の目的と現状を調査し、日本語母語話者が長年、学習してきた英語の知識、英語運用能力と連携する形でのフランス語教授法を構築すると同時に、外国語および日本語において、コード・スイッチングなども交えて「実質的なコミュニケーション能力」の養成を目指す研究を行っています。2022年5月には、米国でフランス語を教えている2人の教員の方に Zoom で講演していただきました。この後、英国、カナダのフランス語教員に Zoom での講演を依頼する計画を立てています。

以上、私の研究対象は、少しずつ変遷し、拡張したり縮小しているように見えますが、共通するテーマは「言葉によるコミュニケーション」です。日本には「以心伝心」という言葉があります。しかし、母語や使用する言語が異なる場合は、背景となる文化や習慣、メンタリティーが異なるため、「以心伝心」は通用しません。言葉を用いて積極的に発信し、言葉でのコミュニケーションを通じて心を通い合わせ、共通理解を深めることが人間の活動として重要だと考えています。

JOURNÉE D'ÉTUDE 2022 科研費

dimanche 22 mai 10h-12h JST
samedi 21 mai 18h-20h PDT

L'enseignement du français aux États-Unis

Conférences en français sur Zoom

Mme Anne Jensen :
Ancienne Présidente de l'AATF (American Association of Teachers of French)
Officier dans l'Ordre des Palmes académiques
Department of World Languages and Literatures, San Jose State University

Mme Catherine Ousselin :
World Language Department Curriculum Specialist, Mount Vernon Schools, the 2017 FNCEL Teacher of the Year and a finalist for the 2018 ACTFL Teacher of the Year

THÈMES TRAITÉS :
- les standards nationaux
- les 5 C's
- les modes de communication
- les plans de leçons et unités
- les nouveaux standards français
- les ressources de l'AATF

Veuillez vous inscrire avant midi du 21 mai à partir du lien suivant :
<https://forms.office.com/G3M5ScVat>
(participation gratuite)

KAKENHI Project/Area Number : 19K00813
Construction of French Didactics related to English, based on purposes and situations of foreign language education in English-speaking countries
Principal Investigator : Noriko NAKAMURA (Konan University)

私の研究

国際言語文化センター兼任研究員 胡 金定

国際言語文化センターの兼任研究員として、研究者の研究について紹介します。

研究分野について

- 一、日本語の研究
- 二、中国語と日本語の比較研究
- 三、中国語教育・教材開発
- 四、日中比較文学・日中比較文化の研究
- 五、企業経営と異文化の研究
- 六、日中交流史の研究
- 七、中国古典「老荘思想」の研究
- 八、中国世界遺産の研究

研究成果について

各研究分野の主な成果を列挙しました。

一、日本語の研究

論文タイトル 掲載誌 掲載時間 出版元

1. 「日本姓名音調」日語学習 1984年第3期 中国商務印書館
2. 「日本地名音調」日語学習 1984年第4期 中国商務印書館
3. 「日本人の名」日語知識 1985年第1期 中国大連外国語大学
4. 「一名七訳話高低」日語知識 1985年第3期 中国大連外国語大学
5. 「新方言」日語学習 1988年第6期 中国商務印書館

二、中国語と日本語の比較研究

1. 日本語と中国語の同形語(1) 共著 日本語と中国語対照研究会 昭和60年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書 1986年
2. 日本語が見えれば中国語も見える 単著 言語と文化 第1号(1997年) 甲南大学国際言語文化センター
3. 「比」構文における「更」と「還」 単著 阪南論集(人文・自然科学編 1998年)第33巻第4号 阪南大学
4. 日中同形語の研究(日本語の形容動詞と中国語の形容詞との研究) 単著 甲南大学平生太郎基金科学研究報告書 甲南学園 2001年3月
5. 中国語複文構造の概観 単著 叢書67 甲南大学総合研究所 2002年
6. 日中同形語の研究(日本語の形容動詞と中国語の形容詞との研究) 単著 甲南大学平生太郎基金科学研究報告書 甲南学園 2003年3月
7. 琉球方言に見る福建方言 単著 叢書85 甲南大学総合研究所 2006年

三、中国語教育・教材開発

1. 多言語学習コンテンツについて 単著 甲南大学情報教育センター紀要 第4号 2005年
2. 针对日本学习者之汉语教育网站 単著 第6届回全球華文網路教育研討会(台湾にて) 學術論文集 2009年
3. 日本甲南大学の网络汉语教学 単著 第10届国际漢語教育研討会(中国瀋陽にて) 學術論文集 2010年
4. ようこそ中国語教室へ—英語も楽しめます—(中国語教科書) 共著 駿河台出版社 2000年
5. はじめての中国語会話ツール24(中国語教科書) 共著 同学社 2001年
6. 中級中国語会話スキット24(中国語教科書) 共著 同学社 2004年
7. 中国文化散歩(中国語教科書) 共著 白帝社 2004年
8. 中級テキスト中国語基礎文法トレーニング(中国語教科書) 共著 白帝社 2006年
9. 中国語コミュニケーションステップ24(中国語教科書) 共著 白帝社 2007年
10. アクティブ中国(中国語教科書) 共著 朝日出版社 2008年

11. すぐ話せる中国語(中国語教科書) 共著 朝日出版社 2009年
12. すぐ読める中国語(中国語教科書) 共著 朝日出版社 2009年
13. 新・はじめての中国語会話ツール24(中国語教科書) 共著 同学社 2009年
14. 楽しく話せる中国語(中国語教科書) 共著 白帝社 2013年
15. 楽しく読める中国語(中国語教科書) 共著 白帝社 2013年
16. 聴力UP!中国語リスニングトレーニング(中国語教科書) 共著 朝日出版社 2016年

四、日中比較文学・日中比較文化の研究

1. 郁達夫と日本文学 単著 相浦泉先生追悼中国文学論集 東方書店 1992年
2. 郁達夫の小説 単著 阪南論集(人文・自然科学編 1993年)第29巻第2号 阪南大学
3. 郁達夫詩論 単著 阪南論集(人文・自然科学編 1994年)第29巻第4号 阪南大学
4. 郁達夫の日記研究(一) 単著 阪南論集(人文・自然科学編 1998年)第34巻第2号 阪南大学
5. 酒の中国文化 単著 言語と文化 第2号(1998年) 甲南大学国際言語文化センター
6. 郁達夫における外国思想・文化の受容 単著 言語と文化 第3号(1999年) 甲南大学国際言語文化センター
7. 郁達夫の日記研究 単著 阪南論集(人文・自然科学編 1999年)第34巻第4号 阪南大学
8. 中国文化と日本文化の異同 単著 (走向文化詩学) 中国福建教育出版社 2000年
9. 郁達夫研究 単著 東方書店 2003年
10. 日中コミュニケーションの違い 単著 言語と文化 第7号(2003年) 甲南大学国際言語文化センター
11. 日本人と中国人 ここが違う 単著 ガッサイ(楽歳)NO.5(通巻203号) 山と渓谷社
12. 中国と日本との異文化理解 単著 南腔北調論集 中国文化の伝統と現代 東方書店 2007年
13. 日中言語表現習慣に見る文化の相違 単著 叢書78 甲南大学総合研究所 2005年

五、企業経営と異文化の研究

1. 企業経営とコミュニケーション 単著 財団法人大韓経営学会誌 2003年11月
2. 企業経営と異文化理解 言語と文化 単著 第8号(2004年) 甲南大学国際言語文化センター
3. 中国における日系企業の経営 戦略と情報戦略に関する理論的・実証的研究 甲南大学平生太郎基金科学研究報告書 甲南学園 2007年

六、日中交流史

1. 悉有仏性 仏教が結ぶ日中友好 共著 読売ライフ 2004年
2. 日本と中国の絆 単著 第三文明社 2015年
3. 日中友好の軌跡 単著 第三文明社 2021年

七、中国古典「老荘思想」の研究

中国古典「老荘思想」の研究について、2013年9月「老子会」を発足して、月に一回の学習会を開き、6年間かけて、『老子』を読了した2019年9月に新たに一般社団法人日中文化振興事業団という名称で法人登録を行い、『莊子』を月に一回の学習会を行っています。

八、中国世界遺産の研究

また、中国世界遺産について、毎日文化センターの要請に応じて、2019年4月から月に一回で「中国世界遺産」講座を開設しています。

研究と問題関心の可視化

国際言語文化センター兼任研究員 金 泰 虎

グローバル化時代の到来によって外国語や異文化理解という教育が重要視される傾向が強まっています。この動向を受け、日本の多くの大学では外国語及び異文化の教育ができる組織を作り、またカリキュラムを整備して教育を行っています。当然ながら外国語や異文化の教育を担う教員の補充も行われています。この一連の動きは、言語と文化という領域の研究にも繋がっています。

甲南大学では国際言語文化センターという組織を立ち上げ、外国語と異文化の教育に対応できる教員を確保しつつ、研究成果が披露できる紀要『言語と文化』という学術雑誌を発行し、教育と研究を担ってきました。しかし、2022年度から国際言語文化センターは主に研究を担う研究所としての機能を果たすことになりました。

この言語と文化に関する教育はもとより研究の一翼を担うべく、私はどのように韓国語を教えたら学習者にとって効果的な学習に繋がるのか、つまり教授法の問題関心から研究を進め、拙著『韓国語教育の理論と実際』としてその成果をまとめました。引き続き、研究所としての国際言語文化センターが目指す役割に相応しい研究、とりわけ韓国語及び韓国文化についての研究も進めて参りたいと思います。

ところで、外国語や異文化の教育と研究に当たり、対象地域の言語や文化だけであれば、外国語と異文化を学ぶ学生や研究を行う研究者にそれほど興味やインパクトを与えることは期待できないと思います。例えば、日本人に「韓国語はこのような特徴のある言語です」ということよりは「韓国語は日本語と比較してこのような類似性をもつ言語です」という比較の観点からの説明や研究のほうがわかりやすく説得力もあることでしょう。また、文化も同じことが言えると思います。つまり、日本人に異文化圏の人が食事をするシーンを見せた場合、食べることは万国共通であり、人間が命を維持するための普遍的行為なので、あまり興味を示さないし、感動もしません。しかし、日本の食文化と異なる異文化圏の人々の行為などが見られる場合は、注意深く見たり興味を示したりします。このことは異文化理解を深めていく上で重要なヒントになります。要するに、日本文化とは異なる異文化の側面、例えば食具を使わず手で食べる行為、あるいは一般的に日本社会では考えられない食材であるゴキブリを食べるといったことについては関心を示します。これは、人間はいつも自文化の物差しという潜在的意識の上で異なる文化を理解しようとする習性があるからだと思います。

このように、比較の視点は学習や研究において自文化と比較の対象が見えるだけに説得力のある説明ができ、研究にも役立ちます。但し、比較の視点という研究は、研究者にとっては分析の対象が2つの領域にまたがり、対象とする両方の文化に関する先行研究や資料の分析が必要であるため難しい側面もあると思います。

私は、今後の研究に当たり、いずれも日韓の比較の視点に基づいて「言語に関わる文化」、そして「日常生活にみる文化」という2つの領域の問題関心を同時に追究して参りますが、これらの研究について少し付言をしておきたいと思います。

前者の「言語に関わる文化」という言語文化に関する研究では、韓国の食物語がいつ頃から日本社会に伝わり、定着しているのかを究明します。つまり、近代国民国家成立期から今に至るまでの時系列的観点に立ち、日韓の現代史における出来事と食物語の関係を照らし合わせつつ、日本社会の中で韓国の食物語が市民権を獲得するまでの推移や傾向、その結果として今日に定着している食物語を明確にします。

そして、後者の「日常生活にみる文化」という研究では、日韓社会における生活の営みの中にみる食文化を中心に分析を行っていきます。とりわけ、日韓社会における試験にまつわる縁起の食物を追究します。激しい競争が伴う選抜試験では、合格するために藁でもすがりたい気持ちになるのは、人間の普遍的情緒であると言えます。そこで、試験を控えて縁起の良い食物を食べたいということを考察するため、日韓社会における選抜試験の始まりを突き止め、一方では試験を控えて避けたいという縁起の悪い食物まで視野に入れて研究を進めます。

最後に、文化という領域の研究に当たっては立証の困難なことが多く存在します。研究の生命線とも言える実証の伴う展開を目指しつつも立証が難しい場合は、矛盾の生じない論理性をもって論を導いて行きたいと思います。

これまでの日本語の研究から

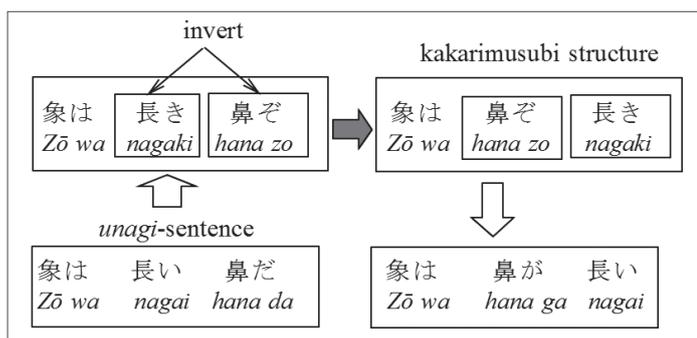
国際言語文化センター兼任研究員 谷 守 正 寛

私は日本語教育の立場では教材開発や教授法について考察するとともに、純粋に日本語という言語について疑問を持ったことから日本語教育に興味を持った人間なので、今なお研究としては日本語自体の謎解きを目的としています。なお、最新の情報は以下の国立研究開発法人科学技術振興機構のサイトにアップされています。

https://researchmap.jp/read0047351/published_papers

本誌では研究紹介ということなので、いちばん気になる日本語の問題に対するこれまでの考察から論文発表の範囲内で一部を簡潔にかつ具体的に抽出して述べたいと思います。

当初からの疑問は日本語の「象は鼻が長い」という有名な文の説明が一筋縄ではいかないことです。これは「-は~が…」という至極基本的な構文でありながら一向にすっきりとした説明がなされないのが現状ですが、かつて「象は」が大主語で「鼻が」が小主語だなどと聞いたことがあり、主語が大きいとか小さいとか言われても本質的にはよく分かりません。この僅かな語で成り立つ基本構文だからこそ小さいようで実は巨大な謎でしょう。これまでの考察を少しく述べますが、この言語構造は証拠を突きつけるよりも合理的に都合よく説明可能な理論構築が可能だと考えます。現代文法では「象の鼻が長い（こと）」という論理構造からの主題化文とされますが、であれば山田孝雄が係助詞として特別扱った「~は」が「鼻が」というちっぽけな主格成分（「鼻が」）の先行部分（「象の」という属格）に過ぎないことになり、「は」の扱いとしては納得がいきかねます。「が」は本来「我が国」のように属格を表しましたが、現代文法では主格とした上での分析であるために、象と鼻が2つの主語としてぶつかる厄介者になっており、これを打破する理論の構築を吟味中です（勿論先行研究も参考に）。最近の私見では「象は鼻ぞ長き（係結び文）」の文末の連体形（後に文末を席卷）が、「象」を「長き」が修飾する元の文「象は長き鼻ぞ」（いわゆるウナギ文）から倒置によって成立したもので、これの元の文は「~は」が文末に体言を論理的格関係に囚われずに据えるという特質によって成立するところの何ら可笑しい表現ではないと考えています。大野晋氏は「連体形+体言ぞ」の句内で体言と連体形が倒置されて「ぞ」が室町時代に消失されたと説きますが、私はさらにウナギ文である倒置後の「象は（なんと）鼻の長いこと（連体形体言相当）よ」の構造に合う形で、先行体言「鼻」に対して、「ぞ」の衰退する箇所に「は」の上記の特質によって本質的には主格ではなく属格である助詞「が」が誘い込まれると「象は（なんと）鼻が長い（ことよ）」が生まれ、そこから「が」が体言相当の「長き」から、連体形文終止が室町時代以降終止形文終止を席卷する過程で「（「長し」ではなく「長き」→）長い」を述語とみる主格として確立されてきたとみえています。拙著よりの右図参照。ウナギ文は現代研究では格のねじれなどと異端視されますが、私は千年前の枕草子の「春はあけぼの」という文以来の日本語の基幹構造であって全く正常な構造だと考えています。西洋の論理で言うところの格関係が成立しないから可笑しいだけであって日本語の本来のまともな構造を有する体言文であると考えています。



国際言語文化センターからのご案内

6号館 5F には「学習指導室」があります！

651「英語学習指導室」/ 652「ドイツ語・フランス語学習指導室」/ 653「中国語・韓国語学習指導室」

学生の皆さんの「外国語」の学習の手助けをするために、授業開講期間中のお昼休み（12：20～12：50）に『**外国語学習相談アワー**』を開設しています。

- ★日々の授業の中で理解できていないこと
 - ★在学中に留学したいが外国語の学習をどのようにしたらいいのかわからない
 - ★外国語担当の先生と雑談してみたい
- etc...

外国語の専任の先生が対応してくれます。気軽に足を運んでくださいね！



■言語ごとに開設曜日が異なりますので、3号館1Fの掲示板を確認して下さい。

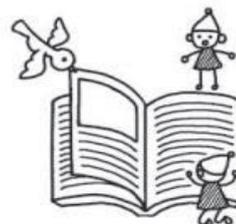
新型コロナウイルスの影響やその他の事情により、内容が変更となる可能性があります。変更となった場合は、My konan や掲示物等によりご案内します。

🌸 自習したり、雑誌を読んだりして語学力をアップ！

学習相談アワーやチューター開設時間帯以外の時、学習指導室は、語学の勉強をする目的であれば、**自由に利用**することができます。

学習指導室には各言語の書籍・雑誌・新聞などがたくさん置いてあります。それらを活用して読解力をアップさせてください！
(ただし、貸出等は、担当専任教員への相談と手続きが必要です。)

利用する時は、3号館1階の全学教育推進機構事務室で利用申し込みをしてください。(学生証が必要です。)



「チューター制度」を利用して語学力をアップ！

「アクティブスチューデント育成プラン」として、各言語（ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語）を母語とするチューターと自由に話せてふれあえる場を設けています。旅行や留学を考えている人はチューターにおすすめスポットを聞いたり、検定試験を受ける人は勉強をみてもらったり、チューターとたくさん会話をして、コミュニケーション能力をアップさせましょう！

■実施場所は2号館1F「Global Zone Porte」内の「Language Loft」または、6号館5F「**学習指導室**」になります。

■言語ごとに開設曜日・時間・実施場所が異なるので、3号館1Fの**掲示板**や**チラシ**、または**My KONAN**で詳細を確認してください。